

論文の内容の要旨

氏名：清水 享

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：近代から現代における彝族社会の変化と文化変容についての総合的研究 —涼山彝族を中心として—

本論文は中国西南地方の彝族の社会の変化と文化の変容について考察する。特に近代から現代の彝族社会や文化の変容や変化についてその実態を把握しようとするものである。そして特に四川省涼山地方に住む彝族に焦点を当てて論を進めるものである。

これまでの彝族の歴史研究で重要視されたのは起源論など問題だった。これは現代中国の中における彝族の文化的な地位を模索することが出発点にあり、古い起源、民族文化の優秀性を示すための研究であった。こうした議論は推論の部分が多く、実証的でない推論や希望的観測で結論が導かれることもあった。また彝族の歴史研究では涼山彝族などの社会性質論争も盛んであった。これは彝族社会の社会発展段階論的位置づけをしようとするものであり、1980年代ごろまでは激しい論争が繰り広げられた。彝族歴史研究で史料や考古資料に基づいた実証的な研究の蓄積は次第に増えてつつあるがまだそれは十分ではない。本論文では今まで焦点の当てられることの少なかった近代から現代にわたる涼山彝族の社会変化、文化の変容の諸問題について総合的かつ実証的に考察を進めるものである。

彝族文化の変容、変遷として涼山地方の葬制、墓制を取り上げて、これを検証する。また彝族社会の様相について漢民族と接触の多い土司に注目し、その漢文墓碑史料を手がかりに土司と彝族社会の実態を明らかにする。また土司「嶺光電」に注目して、近代のなかの土司の実態を解明する。土司を通じて民国時代の彝族の立場まで論じる。さらには文字や言語の問題について、中央研究所蔵の彝文文献の様相とその来歴から、彝文字文献のおかれていた状況について考察を進める。そして宗教職能者「ピモ」の文化的な変容や変遷についても論じるものである。

本論文の手法は文献史学に拠った検証の方法のみならず、考古学的調査と分析の手法、民俗学的視点の援用、言語学分野まで視野を広げ、文化人類学的フィールドワークの方法など多角的な手法で論を展開する。観念的な研究が先行しがちな彝族歴史研究に一石を投じ、今まで十分に把握されなかった近代から現代へかけての研究の蓄積を進めるものである。

第1章では涼山地方各地の葬制、墓制を取り上げ、これを検証し、その地域的な傾向や歴史的な変遷を明らかにした。葬・墓制について土語地域の様相を地域ごとに、漢文文献資料、フィールドワークデータなどからこれを分析した。ここで明らかになった差異と変容で重要なものには次のものがあつた。それは火葬後の遺骨、遺灰の扱い方の差異だった。火葬後の遺骨、遺灰は山中の叢林や洞窟に散骨埋葬する例とその場に埋葬する例の2つの方法があつた。山中の叢林や洞窟などに運ぶ形態は涼山地方の中心地域で行なわれている形態だった。そしてこうした方法がとられる要因の一つとして「冤家」の存在があり、それは死者の遺骨、遺灰に呪術を掛けられることを恐れたためであつた。聖乍土語地域や義諾土語地域では民主改革以前、黒彝の各リネージの勢力が複雑に入り組み、争いも激しかったため、こうした遺骨や遺灰の扱い方が見られるようになった。またマドという位牌に納められていた竹の根を山中の洞窟に納めて祖神化するが、その祖霊化の場が遺骨や遺灰の山中への埋葬と関わりがあつた可能性もある。また涼山彝族における漢文墓碑の墳墓についても分析した。これらはすべて土司のものであり、墳墓は土語地域の区分には関係なく漢文化と接する地域にあつた。そしてその形式は漢民族の影響を受け、なかには「向天墳」という特殊な墳墓も作られたのである。この向天墳は彝漢折衷型の墳墓であり、そのあり方はまさに涼山彝族の漢文化の受容のプロセスの一端を示していた。

第2章では涼山彝族土司の墓碑から涼山彝族土司の状況を考察した。これは彝族と漢民族の中間的な位置に存在した土司から彝族社会の様相を解明するものであつた。それは清代から近代へと見られる涼山彝族土司が残した墓碑史料を手がかりに分析を進めたのである。涼山地方で土司の墓碑の建てられた状況を整理し、19世紀の阿都土司の墓碑史料を中心にその内容を読み解いた。この19世紀の阿都土司の墓碑史料が残されたことによって当時の阿都土司の置かれていた状況を知ることができた。特に同治年間の阿

都土司が涼山彝族の地域で起きていた混乱についての様子が墓碑史料から見て取れた。さらには19世紀以前で不明確になっていた阿都土司の系譜を整理検証し、その族源の特殊性を指摘した。

第3章では20世紀の涼山彝族土司「嶺光電」に注目して、その実態を解明した。嶺光電は土司であっただけでなく彝族の知識人として彝族社会や彝族の人々の地位の向上を目指す運動をしたことを検証した。そして涼山地方における土司としての内政改革と、涼山地方外の南京や重慶などでの地位向上を目指す活動を振り返った。彼のこの涼山内外の活動は一体であることを指摘した。民国時代の嶺光電の土司として内政改革は教育、衛生、アヘン禁止、産業振興など多方面で進められた。涼山地方以外での活動は西南夷族文化促進会、『新夷族』の刊行、西南夷苗土司民衆代表聯合駐京辦事処設立請願運動、西康夷族聯誼会などがあった。これにより各地の彝族とその他の非漢民族の連携がなされた知見も得た。その後、嶺光電は立法委員に選出されるなど、その活動が広がって行くなかで涼山の「解放」を迎えた。

第4章では近代学問が彝族文化を支えた彝族の言語、文字、文献とどのように関わっていたのか中央研究院に収集された彝文字文献資料の様相とその来歴から考察した。そしてこれらの文書が彝語南方方言地域と彝語東部方言地域の文書と彝語北方方言地域の文書であることなどの知見を得た。さらにはこれらの文書の来歴についても分析を進め、これらが紅河渠楽育郷や元江渠洼垵郷付近のものであり、南開大学辺疆研究室の邢慶蘭が収集した可能性が高いことが分かったのである。またこれら以外の多くの文書は馬学良が収集したものであることも確認でき、彼が現地調査を行なった状況から文書の来歴についても考察することができた。そして『ングジシェジョ（艾簡申覚）』という文書は南方方言地域でも珍しい木版本であり、弧本として唯一残されている文書であるということも判明したのである。

第5章では彝族のピモという宗教職能者の変容や変遷について検証を試みた。ピモは1950年代までは農村で主に活動していた。その後、文化大革命中にはピモは地下で活動を続けた。そして改革開放政策以降「町に出るピモ」が現れたのである。またこの他にも多くの町で生活する（県城住まい）のピモも出現した。こうしたなか最も注目されるのが街頭に露店を出し、占い、厄払い、病気治療儀礼などをするピモあるいはスニの出現である。このピモは「真正」でなく「偽」であると認識が広くなされるが、彝族の一般の人々にとってはこのような露店のピモは信頼を得ていることが分かった。また西昌では漢族の「算命先生（占い師）」と露店を並べ、漢方薬剤を販売する露店や民間療法の露店とともに民間療法の複合的なマーケットを形成している状況も現れたのである。こうしたことは彝族のピモが未だ医療の方面で活用されていることを示している。

本論文は近代から現代にかけて涼山彝族を中心としてその社会の変化や文化の変容を総合的に考察した。文化的な側面として彝族の葬制、墓制の形態の地域的な差異やその変遷およびその原因を考察した。また民国時代に中央研究院によって収集された彝文文書とその収集の来歴から、こうした知られざる彝文文書の実態および近代学問と彝文文書の関係を検証した。そしてピモの置かれていた状況を現代史のなかからその変遷と文化変容について分析を加えた。社会的な側面として阿都土司の墓碑史料から19世紀以降の涼山彝族土司の状況を捉え直し、20世紀の涼山彝族土司「嶺光電」という人物から涼山彝族における改革運動や涼山彝族と外部の関係を分析した。彝族の近代から現代における文化の変容、社会の変化は現在ようやくその研究の重要性が問われるようになってきたところであり、未だ空白の部分が多い。本論文ではこうした学問的状况に先んじて、こうした空白部分について複眼的なアプローチをもって、総合的かつ実証的に明らかにした。彝族の文化や社会も近代から現代にかけて、比較的短い時代的なスパンで絶えず外部との関係のなかで変化し、あるいは内部の論理によって変容を見せるなどしていたのである。それは本論文で分析した彝族の墓制や葬制の差異や変容、墓碑史料から見える近代を迎える阿都土司の様相、近代彝族土司「嶺光電」が行なった近代化や彝族の地位向上の運動の知見、近代学問と未解明だった彝文文書の分析、現代史のなかでピモの文化的な変容の実態などからも見て取れるのである。そして知られざる彝族の文化的事象、社会的事象の変容、変化を総合的かつ実証的に検証し、その歴史に光を当てたのである。